

自己点検・評価報告書（応用生物学部）

基準2. 学生
2-2 学修支援

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教員と職員等の協働をはじめとする学修支援体制の整備					
教職協働による学生への学修支援に関する方針・計画・実施体制を適切に整備・運営しているか。	全学教育委員会、学生支援等連絡会など、学修支援にかかわる全学委員会や各学部教務委員会、学生委員会には、教員、事務職員の両方が出席して、意見交換・議論を行い教学にかかわる議論をしている。	-----	a 教員と事務職員が協働して学修支援を行う仕組みが確立しており、さらに発展させる。	他の大学での成功事例を収集し、SD、FDの一環として共有することにより、教員と職員が協力して、学修支援にあたる。	-----
障がいのある学生への配慮を行っているか。また、具体的にどのような配慮をしているか。	障がいのある学生に関して、「アドバイザー教員」（フレッシュヤーズ・ゼミや研究室の教員）を通じて早期把握し、学部と学務課において情報集約している。四肢の障がいに加え、発達障がいなど精神面や大学生生活に障がいのある学生に対しても、他の学生と平等な学修環境を実現するための努力を行なっている。入学前に保護者からの希望を聞き対応可能な事項について配慮を行ってきた。環境整備の一環として、自動ドアの設置、階段シール整備、スクールバスの乗降用スロープの配備などを行った。	-----	a 教職員にむけ「障害者差別解消法」に関する勉強会を開催。外部講師を招いたFDを通じて、大学教育における「合理的配慮」への理解を高めている。式典における手話通訳の導入を行った。	障がいのある学生の状況を、学務課と学生相談室の連携で把握。ノートテイカーなどの受講サポート、試験時やグループワークにおける環境の更なる配慮を行う。更に学部内で把握した、障がいのある学生の情報は2021年度より発足した「ヘルスサポート・センター」における専門医やケースマネージャによって一元管理する計画である。	-----
オフィスアワー制度を常勤・非常勤を問わず全学的に実施しているか。	すべての授業科目で、常勤、非常勤を問わず、シラバスにオフィスアワーの記入を義務付けている。	(改善計画) 教員室のドアの在室を示す掲示やデザインを工夫し、より学生が教員を訪問しやすくする。 (改善状況) 在室を示す掲示やデザインの改善は未着手。新型コロナウイルス感染拡大後はオンラインでの学生対応も行った。	a シラバス点検時に、よりオフィスアワーに注意して点検する。オフィスアワーに教員を訪れる学生はそれほど多くない。 b	シラバスチェックの際に「メールで問い合わせること」といった記載があれば、確保している曜日・時間を具体的に記入するよう科目担当教員に求めることにする。	教員室のドアの在室を示す掲示やデザインを工夫し、より学生が教員を訪問しやすくする。
中途退学者、休学者及び留年生への対応策等を行っているか。	休学や退学を減らすため「アドバイザー制度委員会」を設置し、対応策を立案実行している。学生への面談やアンケートを通じて、休退学に至る理由や状況を分析し、授業の改善や学修環境の改善などに役立てている。アドバイザー教員は休退学希望者との面談を行い、休学中には復学にむけてのフォローを行っている。研究室での活動を重視している本学部においては、卒業研究着手者の研究室への不適合がときどき見られる。学務課-学生委員長-学部長の連携により研究室の変更を柔軟に認めるなど退学に至らないための対応を工夫した。	(改善計画) 問題の早期検知や教員、学生、事務職員が問題を共有、把握しやすくなるような学生カルテのシステムの更新の準備をはじめめる。 (改善状況) 引き続き検討する。	a 必修科目の出席データのチェック、進級要件の緩和、学生が躓きやすい授業カリキュラムの改善などにより、休退学率は減少している。 b 問題の早期検知や教員、学生、事務職員が問題を共有、把握しやすくなるような学生カルテのシステムの更新	これまでの退学防止施策の有効性を検証しながら、カリキュラム面、学生生活面、学修意欲の増進など多面的に退学・留年抑制策を進展させる。問題のある学生の出席状況の確認を、より正確で即時性のあるものとする検討および精神的に弱い学生へのサポート体制の強化を検討する。	問題の早期検知や教員、学生、事務職員が問題を共有、把握しやすくなるような学生カルテのシステムの更新の準備をはじめめる。
② TA等の活用をはじめとする学修支援の充実					
教員の教育活動を支援するために、TAなどを適切に活用しているか。	実験科目、演習科目、大人数の講義科目などを中心にTAを配置し、教員の監督下で、授業の補助を行っている。また、フレッシュヤーズゼミにSAを配置し(ピアサポーター)、同年代の学生の目線を授業運営に採り入れ、入学者が早期に大学生活へなじめるように工夫している。さらに1、2年生の必修講義科目、大人数の講義科目にもSAを配置し、基礎教育活動を支援している。	-----	-----	-----	-----

自己点検・評価報告書（応用生物学部）

基準2. 学生
2-3 キャリア支援

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 教育課程内外を通じての社会的・職業的自立に関する支援体制の整備					
インターンシップなどを含め、キャリア教育のための支援体制を整備しているか。	1年次から3年次にかけては、社会への主体的な参加から学びを得る「サービスマーケティングⅠ～Ⅳ」、2年次では、現場での第一線での仕事を体験する「インターンシップⅠ、Ⅱ」を用意している。	(改善計画) 学生が希望する業種は、インターンシップを実施していない企業が多いのが現状である。インターンシップを実施している企業の開拓および情報の周知に努める。 (改善状況) 2020年度は新型コロナの影響で企業がインターンシップそのものの機会が減少し、改善は難しかった。	a : 2020年度は新型コロナの影響でインターンシップそのものの機会が減少し、インターンシップ参加者は増えなかった。ここ5年間ではインターンシップ応募者は増えているが(2015年度88名→2017年度180名→2020年度146名)、2020年度はコロナ禍の影響で減少した。 b :	コロナ禍の影響で、インターンシップ参加については効果が上がった点はなかった。引き続き、インターンシップの重要性を説明したい。	インターンシップを実施している企業の開拓および情報の周知に努める。
就職・進学などに対する相談・助言体制を整備し、適切に運営しているか。	八王子、蒲田両キャンパスに「キャリアサポートセンター(CSC)」及び「キャリアコーポセンター(CCC)」を設置し、就職活動準備や就職活動に関する対策・実践講座・セミナー(社会人マナー、面接・エントリーシート対策、業界・業種研究会、合同企業セミナー、個別企業セミナー、就職活動マッチング、キャリアアドバイザーによる相談や模擬面接など)を随時実施している。	(改善計画) 支援が必要と思えるが応答のない学生に対して、所属研究室教員との連携を強化する。 (改善状況) 研究室教員、就職特任講師、キャリアコーポセンター、3者の情報交換を一層密にできるよう、就職委員長が間に入るようにした。	a : コロナ禍にも関わらず、ほぼ例年に近い水準の就職内定率を維持した。内定を取得出来ない学生のうち、研究室教員、就職特任講師、キャリアコーポセンターのいずれとも連絡がつきにくい学生への対応 b :	3年生11月実施の模擬面接後のフォローアッププログラム(個別面談を含む)の対象人数の増加および対象者の適切化をはかる。	支援が必要と思えるが応答のない学生に対して、所属研究室教員との連携を強化する。就職特任講師を中心とした個別指導形式の確立。
他大学のキャリア支援に関する取り組みなどを収集・分析し、キャリア支援体制の見直しなどに役立っているか。	東京理科大学、千葉科学大学などが行っている、専攻分野と関連する企業を対象としたシンポジウムを参考に、さらに学生の研究発表を加えた形で「化粧品科学シンポジウム」「食品科学シンポジウム」として年1回実施している。(「化粧品科学シンポジウム」「食品科学シンポジウム」の実施は平成30年度を最後に終了となった)	(改善計画) シンポジウム開催による専攻の知名度向上の役割は終えたので、他大学のキャリア支援に関する取り組みなどの情報を収集し新たな企画を検討中である。 (改善状況) 引き続き検討する。	a : 大学の専攻の企業への知名度向上。学生発表内容に対する企業からの高評価 b : 学生個々へのキャリア支援としての効果はあまり高くない。また企画内容の陳腐化。	学生の研究発表を通して企業や社会との接点強化を進める。大学主催シンポジウムではなく学会での発表をその舞台とする。	シンポジウム開催による専攻の知名度向上の役割は終えたので、他大学のキャリア支援に関する取り組みなどの情報を収集し新たな企画を検討中である。

自己点検・評価報告書（応用生物学部）

基準2. 学生
2-4 学生サービス

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 学生生活の安定のための支援					
学生サービス、厚生補導のための組織を設置し、適切に機能しているか。	学務課・学生係において、学生サービスの実態を一元的に把握、厚生補導のための施策を行なっている。また学部内に学生委員会を組織し、学生委員長を中心に日常的な学生への配慮と指導を行っている。平成29年度からは学生委員会を定例化し、学生委員の教員間での情報共有を緊密にした。さらに学生委員会内には「アドバイザー制度委員」を置き、さらに詳細な指導を行なっている。	(改善計画) 学生相談室と医務室との連携から「ヘルスサポート・センター」に改組することで、臨床心理士など専門家によるアドバイスも受けられるようにする。 (改善状況) 2021年度からヘルスサポートセンターを開所した。	a : (1)「アドバイザー制度委員」は学部のアドバイザー教員と連携し、学生生活の向上のために周密的な観察指導を行なっている。 (2) 学生委員会の議論を学部教員間で情報共有できている。 b : 学部の学生委員会とヘルスサポートセンターとの連携の確保	「アドバイザー教員」が把握する学生に関する情報を、一元管理活用することで学生サービスのさらなる向上につなげる。	新設される「ヘルスサポート・センター」と学部教員、学生委員会、事務職員の連携を密にする仕組みを構築する。
奨学金など学生に対する経済的な支援を適切に行っているか。	経済的支援を必要とする学生や学修意欲の高い学生、私費留学生などに対して、広く平等に修学の機会を与えるため、公的あるいは大学独自の各種奨学金の公募審査を行なっている。災害発生時には「自然災害における学費減免」などの支援制度を設けている。学費の分納・遅延対応にも柔軟に対応している。その他「私費外国人留学生授業料減免制度」や優秀学生への「学長賞/学部長賞」などの奨励金制度も設計した。その他、地方公共団体の奨学金、東京工科大学同窓会奨学金などについて、随時学生への紹介を行っている。	(改善計画) 奨学生でありながら、成績不振のため留年となり、学業を続けられないというケースを未然に防ぐ施策を考えたい。 (改善状況) 奨学生の留年、退学に関する問題が奨学生入試制度の改革の影響で軽減したと考えられるが、奨学生の状況を把握し、必要な対策を今後も行う。	a : 海外の大学から受け入れた私費留学生への授業料減免。各学部での成績優秀者への褒賞。「奨学生入試」制度を開始、入学時からの成績優秀者への奨励を開始した。 b : 学生支援緊急給付金など新型コロナウイルス感染症に関連した給付金の受付、選考を適切に行った。	経済的な問題を抱えつつも、成績優秀である学生に対して、より幅広い支援制度について検討していきたい。	
学生の課外活動への支援を適切に行っているか。	学生の自主的な活動としての、各種イベント（文化祭/スポーツ大会/音楽祭等）やサークル活動に対して実施運営のサポートや予算管理の指導を行なっている。学生間で円滑な活動が行われるよう、各種イベントの実行委員や、サークルのリーダー（部長/会計）に対して、リーダーズキャンプを開催して育成指導している。新型コロナウイルス感染症の問題で、キャンパスへの立入りや課外活動に制限がかかり、新入生の課外活動参加率が大幅に低下した。	(改善計画) 学生による「企画力」の低下、リーダーシップのとれる人材の不足が懸念されている。発想豊かな人材育成の施策が必要 (改善状況) 学部の新入生歓迎イベントのなかでサークル、部活動への加入機会を確保するようにしている。	a : 学園祭（紅華祭）やスポーツ大会では、学生による自主運営と独自企画をサポートし学生の創意工夫によるイベントを実現。 b : 新型コロナウイルス感染症の問題で弱体化しているクラブ活動・サークル活動の復興。	日頃、対人関係に自信のない学生や社会生活に馴染めない学生を、各種課外活動を通じた経験の中で成長させる仕組みを発展させていきたい。	新型コロナウイルス感染症の問題で弱体化しているクラブ活動・サークル活動を復興させることが必要である。このために、新入生の確保の機会を適切に提供するとともに、クラブ活動やサークル活動の教員、学生、保護者、学部への広報の機会を増やす。
学生の心身に関する健康相談、心的支援、生活相談などを適切に行っているか。	学務課・学生係と各学部における教務委員会が連携しながら、学生の心身に関する健康相談を受け付けている。日常的には「アドバイザー教員」が学生生活における相談の窓口となるほか、学生相談室における相談員が専門的なアドバイスを与え、心的支援を行っている。また、全学で導入している先輩学生による「ピアサポーター制度」を活用し、学業成績が良い学生や活動が活発な学生をアドバイザーリーグループのサポーターとして活用し、教員には相談しにくい相談を受け付ける体制を構築した。	(改善計画) 昨今の学生が人間関係の問題を抱える上で大きな要因となるのが「SNS」である。こうした問題にも取り組んでいきたい。 (改善状況) 2021年度からヘルスサポートセンターを開所した。専門家と学部教員などとの連携の機会を確保していく。	a : (1) 授業や演習における「グループワーク」が苦手という学生には、個人作業の機会を与えるなどの配慮を進めた。 (2) 履修計画や課外活動やアルバイトなど教員には相談しにくい内容をピアサポーターに相談できるようになった。 b : フレッシュャーズゼミを担当する教員や卒業研究指導教員の学生生活に関わる問題への対応能力の向上。	アクティブラーニングの良さを継承しつつも、学生自身のメンタルコンディションに配慮しつつ、多様な学修の機会を与えるようにしたい。ピアサポーターの有効活用のために、毎年活動実績のアンケートを行い、効果的な活用を継続検討する。	フレッシュャーズゼミを担当する教員や卒業研究指導教員の学生生活に関わる問題への対応能力の向上のために、学生委員会を中心に教員向けのセミナーの企画をおこなう。

自己点検・評価報告書（応用生物学部）

基準2. 学生
2-6 学生の意見・要望への対応

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度 までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に 策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 学修支援に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用					
学生への学修支援に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学修支援の体制改善に反映させているか。	授業アンケートを全科目で実施している。また、在学生調査を各学年(新2年生、新3年生、新4年生)で実施している。さらに学修支援センターでは学修の問題を抱える学生の相談に個別に乗ると同時に、学修支援センター指導員、学務課職員、教員による懇談会を年2回実施している。主要な建物に匿名でも投函可能な意見箱(Box for Best Care:BBCと命名)を設置し、学長室が直接開箱することにより、ハラスメントを含めた学修上の訴えを受け付け、必ず回答している。回答は、学生ポータルサイトに掲載している。応用生物学部では1年生前期の授業(フレッシュャーズゼミIや、1年生学生実験)で意見・感想を書かせ、早期のつまづきに対応している。また、新型コロナウイルス感染症の学修等への影響に関するアンケートを実施した。	(改善計画)学修ポートフォリオの何らかの形でシステム化をおこない、学生自身が自己の学修内容を振り返りができるようにする。 (改善状況)学修ポートフォリオのシステム化は未着手。2021年度に採用システムの検討、導入準備を進める予定。	a 2018年度より、授業アンケートおよび在学生調査の調査項目を見直し、データ取得方法を紙ベースからWebベースに変更した。 学修ポートフォリオの整備による学生自身による学修振り返りとその内容の教員による把握を進めることが必要である。 b	授業アンケートや在学生調査で取得したデータのIRセンターでの解析をすすめる。	学修ポートフォリオの何らかの形でシステム化をおこない、学生自身が自己の学修内容を振り返りができるようにする。
② 心身に関する健康相談、経済的支援をはじめとする学生生活に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用					
学生生活に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、学生生活の改善に反映しているか。	学生生活に対する学生の意見要望を「アドバイザー教員」が受け、半年ごとの面談や各種アンケート調査などを通じ学生の状況を把握している。学務課・学生係では、ハラスメントを含めた学生意見を広く受け止める窓口を設けている。また、意見箱(BBCボックス)を学内各所に設けることで日常的な要望を集約し、学生生活の改善に役立っている。また、卒業生アンケート、在学生アンケート、新型コロナウイルス感染症の影響に関するアンケートなどを実施し、学長室、各学部の学生委員会などで内容を確認、改善提案に結びつけている。	(改善計画)学生が日常生活の中で問題と感ずる問題は、日々多様化複雑化している。特にネット上の情報を通じた人間関係のトラブルなどのケースにも対応していく必要がある。 (改善状況)2021年度からヘルスサポートセンターを開所した。	a 前述の意見箱や学生係窓口には、日常的に学生からの要望が集まり、学生生活の問題の把握とフィードバック、学修環境の改善に役立っている。 b より複雑な問題に対しての対応能力の向上	学生からの要望を集約し、今日の学生が抱える生活上の問題を分類解析する。今後の適切な対応策の立案検討に役立てたい。	新設されるヘルスサポートセンターと教員、事務員の連携体制を構築する。
③ 学修環境に関する学生の意見・要望の把握・分析と検討結果の活用					
施設・設備に対する学生の意見などをくみ上げるシステムを適切に整備し、施設・設備の改善に反映しているか。	上記②と同様に学生係の窓口、意見箱など多様なチャンネルを通じて、学生の意見をくみあげている。「アドバイザー教員」を通じた聞き取りやアンケートからも要望を吸い上げている。特に教室環境、インターネット環境、学生食堂やトイレなど、要望の多いものには常に施設・設備の改善に取り組んでいる。環境改善要望については、受付メールアドレスを公開している。本学部の卒研室のほとんどがある片柳研究所棟のトイレの改修が実施された。	(改善計画)学生に対して、施設・設備の利用時のトラブルを防ぐために、施設利用の指導を行うとともに、今後もより安全で快適な環境整備のために学生からの意見を収集する。 (改善状況)新型コロナウイルス感染症の影響下での教育・学生生活について、前期・後期の2回、アンケートを実施するなど、状況に応じた実態と要望の把握をした。	a 学内のトラブルや犯罪に繋がる老朽化した施設の改善に学生からの要望を取り入れている。食堂業者の選定、メニューの改善にも学生の意見を参考にしている。実施したアンケートの分析を組織的に行う。 b	今後はより積極的な聞き取り調査やアンケートなどを行い、学生の要望を多角的に集約検討していきたい。	大学レベル、八王子キャンパスレベル、学部レベルでさまざまなアンケートが実施されているが、学部長あるいは学生委員長だけでなく、学生委員会を中心として組織的に意見を解析する体制を整備する。

自己点検・評価報告書（応用生物学部）

基準3. 教育課程
3-1 単位認定、卒業認定、修了認定

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価		今後の計画	
			a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点	効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期計画)	
① 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーの策定と周知						
①-1 教育目的を踏まえたディプロマ・ポリシーを定め、周知しているか。						
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なディプロマ・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のディプロマポリシーを定めている。さらに、大学共通のディプロマポリシーに専門的能力を具体化した形で、学部ごとにディプロマポリシーを定めている。大学院については、専攻ごとに定めている。応用生物学部の教育目的を踏まえ、ディプロマ・ポリシーを定めている。大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において周知している。	-----	-----	-----	-----	-----
ディプロマ・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧（大学院学生便覧）において公開しており、適切な公開方法である。	-----	-----	-----	-----	-----
② ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等の策定と周知						
ディプロマ・ポリシーを踏まえた単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準等を適切に定め、周知厳正に適用しているか。	各科目とディプロマポリシーに定めたラーニングアウトカムズの対応関係を示したカリキュラムマップを作成し、科目ごとの到達レベルをシラバスで記述している。各科目の単位認定にあたっては、シラバスに単位認定基準（成績評価基準）を明示し、各教員がシラバスに従った評価を行っている。1年から2年の進級要件および卒業課題の着手要件を定め、学修状況に応じた科目履修を進めるとともに学修が困難な学生の早期の発見に努めている。卒業認定基準は所定の科目の履修によって認定しており、各科目で定めたラーニングアウトカムズとの対応の相対でディプロマポリシーを保証している。進級基準、卒業認定基準については、学部教務委員会および教授会において、それぞれ根拠資料を回覧し、厳正に適用している。	-----	a : 卒業課題の着手要件の見直しを進めている。	卒業課題の着手要件について、進級率、卒業実績などのデータをもとに、継続的に見直しており、2019年入学者から新たな要件に見直した。	-----	-----
③ 単位認定基準、進級基準、卒業認定基準、修了認定基準の厳正な適用						
単位認定基準、進級基準、卒業・修了基準を定めて、これを厳正に運用しているか。	各科目の単位認定にあたっては、シラバスに単位認定基準（成績評価基準）を明示し、各教員がシラバスに従った評価を行っている。シラバスが学生と教員との契約であるとの意識を、全学教育委員会を通じ、学部教務委員会、学部教授会で教員へたびたび周知している。卒業認定については、学部教務委員会および教授会において、それぞれ根拠資料を回覧し、厳正に運用している。	-----	a : 学部教務委員会、教授会、学務課が相互にチェックしあいながら、厳正な基準の運用ができています。	教職員が高い意識を保ち、連携するための情報の共有と研修の充実を行う。	-----	-----
単位認定基準、卒業・修了基準を定めて、教育課程の編成・実施に反映させているか。	現状の教育上の問題点を学部教授会およびアゴラで確認することにより、現状カリキュラムの問題点を共有している。学術や社会の変化に加えて、各科目の単位取得状況、退学率、進級率をモニタリングすることによって、カリキュラムの継続的見直しを学部教務委員会が中心となり、4年に一度の頻度で行っており、その見直しの全学的な調整を全学教育委員会がおこなっている。 あ	（改善計画）ラーニングアウトカムズのとくにコンピテンシーの定量化をすすめるとともに、コンピテンシーの育成により配慮したカリキュラム設計をすすめる。 （改善状況）コンピテンシー定量化のための外部アセスメントテストを2020年度から導入した。	b : 各分野の専門力育成のための授業は提供されているが、コンピテンシーの育成が十分にされているのか評価がされていない。	-----	ラーニングアウトカムズのとくにコンピテンシーの定量化をすすめるとともに、コンピテンシーの育成により配慮したカリキュラム設計をすすめる。	-----
単位認定など成績評価の公平性のためにどのような工夫をしているか。また、GPAなどをどのように活用しているか。	担当教員による判断のばらつきが出ないよう、成績分布に関してガイドラインを設定している。GPAを算定し、成績表によって学生へ周知するとともに、GPAを単位の上限キャップの緩和、早期卒業制度の適用、コースの決定、研究室の決定に活用している。	（改善計画）ルーブリックを用いた卒業研究の評価および卒業研究の各ラーニングアウトカムズへの対応の実質化をおこなう。 （改善状況）応用生物学部ではルーブリックを用いた卒業研究の評価は未実施。全学的に他大学でのルーブリックの卒業研究評価への導入事例を調査する予定。	b : 評価基準の統一を一層進める必要がある。とくに卒業論文/卒業研究の評価の統一が望まれる。複数クラスで行なっている科目においてクラス間での評価基準の統一も望まれる。全科目の成績分布を教授会もしくはアゴラで確認し、教員相互にチェックする。	-----	ルーブリックを用いた卒業研究の評価および卒業研究の各ラーニングアウトカムズへの対応の実質化をおこなう。	-----

自己点検・評価報告書（応用生物学部）

基準3. 教育課程
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① カリキュラム・ポリシーの策定と周知					
教育目的を踏まえ、カリキュラム・ポリシーを定め、周知しているか。	応用生物学部の教育目的を踏まえ、カリキュラム・ポリシーを定めている。大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において周知している。	----	----	----	----
各学部、研究科が定める教育研究上の目的を達成するための適切なカリキュラム・ポリシーを定めているか。	大学全体で定める共通のカリキュラムポリシーを定めている。さらに、大学共通のカリキュラムポリシーに専門分野を具体化した形で、学部のカリキュラムポリシーを定めている。	(改善計画) 学修成果のモニタリングをもとに、カリキュラムポリシーが不変でよいかを不断に点検し、必要があれば見直していくことを検討する。 (改善状況) カリキュラムポリシーの見直しは未着手。	b : カリキュラムポリシーの設定はおこなったが、教育の現状をもとに、その継続的な見直しを議論していく。	----	学修成果のモニタリングをもとに、カリキュラムポリシーが不変でよいかを不断に点検し、必要があれば見直していくことを検討する。
カリキュラム・ポリシーをどのように公開しているか。また、その方法は適切か。	大学のウェブサイト、大学案内、学生便覧において公開しており、適切な公開方法である。	----	----	----	----
② カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーとの一貫性					
カリキュラム・ポリシーとはディプロマ・ポリシーとの一貫性が確保されているか。	カリキュラムポリシーでは、全学部共通の6つのラーニングアウトカムズを育成するプログラムを定めており、このうち、専門力の部分に学部の特色があらわれている。ディプロマポリシーにおいても、6つのラーニングアウトカムズの達成を規定しており、両ポリシーは整合している。	----	----	----	----
③ カリキュラム・ポリシーに沿った教育課程の体系的編成					
カリキュラム・ポリシーに即した体系的な教育課程を編成し、実施しているか。	科目全体をカリキュラム・ポリシーで示した「教養教育科目・基礎教育科目」及び「専門科目」に分け、さらに専門科目は「専門基礎・共通科目群」と「専門科目群」から構成される体系に沿った具体的なカリキュラムを編成した。各学部においては、学部のカリキュラムポリシーにそれらの科目・科目群の具体的な内容を記載し、それに対応する履修科目を編成している。	(改善計画) 内容の重複しているいくつかの専門科目を閉講する (改善状況) 2021年度に薬理学と内容の重複している薬学を閉講する。	b : 応用生物学部の専門分野の知識を効率よく体系的に学ぶために専門科目の見直しを行う。	----	内容の重複しているいくつかの専門科目を閉講する
シラバスを適切に整備しているか。また、作成にあたって第三者による検証を実施しているか。	シラバスは、全学で共通のものを教務システムから教員が記入する。シラバスが学生との契約である意識を徹底し、評価方法の具体的な記載、ラーニングアウトカムズとの対応、などまで含めて、記載内容を明確に教員に徹底している。書かれたシラバスは、学部の教務委員長が中心となり、記入者以外の教員がチェックし、また、事務職員も内容を確認している。	(改善計画) シラバスをチェックする教員を増員する (改善状況) チェックする教員を2名から3名に増員した。	b : シラバスのチェック体制を強化し、教員間でのシラバスへの相互理解を深める。	----	シラバスをチェックする教員を増員する

自己点検・評価報告書（応用生物学部）

基準3. 教育課程
3-2 教育課程及び教授方法

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a : 効果が上がった点 b : 改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
④ 教養教育の実施					
教養教育を適切に実施しているか。	八王子キャンパスの4学部においては、ほぼ共通の教養教育カリキュラムを編成している。応用生物学部においても、外国語、自然、人文社会、ウェルネスの各科目群と社会人基礎科目の一部の企画、立案、実施を教養学環が担当しており、学部との調整を綿密に行っている。海外語学研修などの海外プログラム、スキー実習など特色ある科目も提供している。	(改善計画) 同じ科目群内や異なる科目群間の関係ある科目間の関係をネットワーク図等で可視化し、教養教育全体や科目間関係の学生理解を深め、学修効果を深める。 (改善状況) ネットワーク図等による可視化は未着手。	a 教養教育科目の各学部との連携の強化 : 教養教育全体像の可視化と公開 b :	従来より、教養教育科目の教育は学部との連携によって行われてきたが、今後も連携と自主性のバランスを保ちながら、教養教育を実施する。	同じ科目群内や異なる科目群間の関係ある科目間の関係をネットワーク図等で可視化し、教養教育全体や科目間関係の学生理解を深め、学修効果を深める。
教養教育を担当する組織の活動状況等を適切に把握しているか。	教養学環は、独自の教授会、独自の教務委員会を持ち、大学評議会、教育力強化委員会、企画推進委員会そのほかの全学の委員会に独自の委員を参加させている。また、学修支援センターの運営に大きく関与している。	(改善計画) 2キャンパスや各科目群教員間の連携・情報共有が一層重要になってくるので、ICTを活用するなどして、活動状況・情報の可視化と教員間での共有を促進する。 (改善状況) 引き続き検討する。	a 教養学環の組織の維持・活性化の促進 : 教養教育の目的・目標の教養教員全体での共有と目標達成への協働の促進 b :	新任教員を補充する際には、担当科目の専門性を有していることはもちろんのこと、各種の学外研修など多面的な教養教育活動を支えることができる教員を積極的に採用する。	2キャンパスや各科目群教員間の連携・情報共有が一層重要になってくるので、ICTを活用するなどして、活動状況・情報の可視化と教員間での共有を促進する。
⑤ 教授方法の工夫・開発と効果的な実施					
アクティブ・ラーニングなど、学生の主体的な学びを促す授業内容・方法に工夫をしているか。	アクティブラーニング、反転授業、グループ学修、プロジェクトベースラーニング(PBL)について、全教員が参加する全学教職員会でその手法を紹介し、授業ごとのこうした手法の活用の有無について、教員への授業方法アンケートでモニタリングしている。これらのうち、アクティブラーニングについては、教員による授業評価の評点項目としている。	(改善計画) 反転授業などを支える大容量データを配信できるIT環境を整備し、反転授業の撮影など教材準備を行う部署を設置する。アクティブラーニングの実施を支援するIT技術の講習会を実施する。 (改善状況) 先進教育支援センター所属の教員がIT環境の整備、IT技術のサポートを行っている。	a 授業方法アンケートの教員への実施 : 反転授業などを支えるインフラが動画配信など大容量配信には十分ではない。アクティブラーニングの実施を支援するIT技術に対する教員の理解を深める。 b :	授業方法アンケートを継続的に実施し、IRセンターにおいて結果の解析を行う。	反転授業などを支える大容量データを配信できるIT環境を整備し、反転授業の撮影など教材準備を行う部署を設置する。アクティブラーニングの実施を支援するIT技術の講習会を実施する。
教授方法の改善を進めるために組織体制を整備し、運用しているか。	「教育力教育委員会」を設置し、教員の教授法について教員による授業点検を定期的に行っている。	(改善計画) 学生の授業評価、成績分布などを、学部教務委員会、教授会、アゴラなどで振り返り、その授業改善への利用が望まれる。 (改善状況) 学生の授業評価、成績分布などを、教授総会、アゴラで振り返り、授業改善への利用について意見交換している。	a 教育力強化委員会を学長直属で設置し、学長室が事務補佐をしている。授業アンケート結果や成績分布をもとにした授業の改善が十分ではない。 b :	教授方法、教育改善などに精通した事務職員の継続的育成と教育方法を専門とする教員の採用をおこない、教員に対する教育支援組織を整備する。	学生の授業評価、成績分布などを、学部教務委員会、教授会、アゴラなどで振り返り、その授業改善への利用が望まれる。
履修登録単位数の上限の適切な設定など、単位制度の実質を保つための工夫が行われているか。	学期ごと24単位を履修上限とし、特別に成績優秀者に対して、28単位までの履修を認めている。15週の授業時間を講義曜日にかかわらず確保し、休講に対する補講期間を設けている。シラバスに準備学修の欄を設け学生の予習・復習内容を具体的に指示・明記している。実際の授業外学修時間を授業アンケートによってモニタリングしている。	(改善計画) 八王子キャンパスにおいて、90分×15週の講義を100分×14週に改めることを検討している。 (改善状況) 2020年度から100分×14週に改めた。	a 授業外学修時間のモニタリングを授業アンケートの中で開始した。15週の講義期間をとる場合、再試験と学外実習(ボランティアや海外語学研修など)の期間が重複する。 b :	授業科目ごとに、授業外学修時間を十分に取れない理由の解析をすすめる。	八王子キャンパスにおいて、90分×15週の講義を100分×14週に改めることを検討している。

自己点検・評価報告書（応用生物学部）

基準3. 教育課程
3-3 学修成果の点検・評価

点検・評価項目	平成26年度から令和2年度までの実績を踏まえた現状	平成30年度自己点検評価時に策定した改善計画の進捗状況	自己評価 〔 a：効果が上がった点 b：改善が必要な点 〕	今後の計画	
				効果が上がっている点の 発展計画	改善が必要な点の改善計画 (次年度計画及び中期的計画)
① 三つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価方法の確立とその運用					
学生の学修状況・資格取得状況・就職状況の調査、学生の意識調査、卒業時の満足度調査、就職先の企業アンケートなどによりを実施し、大学が定めた多様な尺度・指標や測定方法に基づいて学修成果を点検・評価しているか。	学生の単位取得状況、進級率、卒業率については、事務局学務課、学部教授会、学部教務委員会においてデータをまとめている。就職率、就職先については事務局キャリアサポートセンターおよび学部就職委員会で評価している。入学時および年度初めガイダンス時に在学生調査を実施し、その結果をIRセンターで解析の上、企画推進会議、学部教授会で報告している。	（改善計画）ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法を確立する。コンピテンシーの客観試験による評価、卒業論文指導教員によるコンピテンシー評価などを実施する。また、学生の就職状況の質を評価する方法を検討していく。 （改善状況）ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化のための外部アセスメントテストを2020年度から導入した。	a 進級率、卒業率、就職率などの指標が取られ、在学生調査が行われている。 学修成果の可視化において、現在、数値化している指標は取得単位数とGPAのみである。より学修内容が可視化されることが望ましい。また学生輩出先に関する就職率以外により就職の質を表す指標が必要である。 b :	進級率、卒業率、就職率、在学生調査などの結果が、キャリアサポートセンター、学務課、法人の広報部などに分散しており、IRセンターでの一元管理、解析が望まれる。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法を確立する。コンピテンシーの客観試験による評価、卒業論文指導教員によるコンピテンシー評価などを実施する。また、学生の就職状況の質を評価する方法を検討していく。
② 教育内容・方法及び学修指導等の改善へ向けての学修成果の点検・評価結果のフィードバック					
学修成果の点検・評価の結果を教育内容・方法及び学修指導の改善にフィードバックしているか。	令和2(2020)年度から、外部業者作成の汎用的能力測定テストを採用して、1年次生及び3年次生に受験させた。この試験結果から本学で定める学習成果の到達度を換算する指標を設定し、学生にこれをフィードバックした。	（改善計画）ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法の確立に合わせて、カリキュラム改善を科学的に検討する体制の整備とそれを支援する全学的な組織の整備が必要である。 （改善状況）カリキュラム改善を科学的に検討する体制の整備とそれを支援する全学的な組織の整備は未着手。	a クラス担任による面談による学生の学修状況の把握 カリキュラム改善がより客観的な指標に基づいて行われることが望まれる。 b :	クラス担任による面談の継続的な実施および面談率の向上。	ラーニングアウトカムズの各項目に対応する学修成果の可視化方法の確立に合わせて、カリキュラム改善を科学的に検討する体制の整備とそれを支援する全学的な組織の整備が必要である。